

美しく勝つ—— ブラジルサッカーの神髄

日経HR 代表取締役社長

わだ まさみ
和田 昌親



よくぞこんなにデカイものを——ブラジルサッカーの聖地マラカナン・スタジアムはリオデジャネイロ（リオ）の中心部にあり、世界一の大きさを誇る。1950年開場以来、巨大な円形すり鉢状の姿が辺りを威圧するように鎮座している。試合のある日は地鳴りのような歓声が街全体を包み込む。むろん「やかましい」という苦情はない。

20万人収容可能という触れ込みだが、実際には客席は10万人分しかない。立ち見を入れた人数というあたりがブラジルのご愛嬌だが（日本最大のサッカー場は横浜国際総合競技場の7万3,000人収容）、世界最大級には違いない。試合中は何万人というサポーターが一斉に小刻みなジャンプを繰り返し、スタジアムを揺らす（ように見える）。

コンクリート構造が耐えられるか心配になるが、陽気なブラジル人は得意のピアード（ジョーク）で答える。「次に起こる世界的悲劇はマラカナンが試合中に崩れ落ちた時だ」と。現実にそんなことがあってはならないので2007年に大規模改修を行い、2014年のW杯決勝の出番を待つ。その決勝の場にはブラジル代表が勢ぞろいしているはずだ。

ブラジルにとってサッカーとは？ 愚問であろう。この国の人たちにとっては人生そのものなのだ。「国民全員がサッカー評論家」といわれるほどだから、サッカーは国民の血肉に染み付いている。W杯期間中は会社も役所もお店もほとんど休業状態だ。

ブラジルサッカーが「いつも強い」のはなぜ

か。詰まるところボールに接する機会が多いからだ。子供たちはよちよち歩きの時からボールに触っている。そして優秀な子供はジュニアサッカー選手養成組織の門をたたく。その組織から選ばれた若者だけが全土で800ともいわれる地方のプロチームにスカウトされていく。若者には「貧困からの脱出」という強いモチベーションがあるから、目の色が違う。

教育のないジュニア選手が多いが、彼らは常に上級プロをマネしているから、技術も戦術も細かく教える必要はない。「お前はこのポジション」と言われると、子供たちは条件反射のように正確に対応する。むろん4-4-2というブラジル代表の基本陣形や1トップにしたときの変形などはすべて理解している。

サッカーは堂々たる「ブラジル文化」の1つといえる。かつて三浦カズが「日本にサッカー文化が根付くまでがんばる」と言っていたが、その「サッカー文化」とは彼がプロの道を歩みはじめたブラジルをイメージしているように思う。

ブラジルにサッカーが上陸したのは19世紀後半。当時は英国系移民を中心とした「白人サッカー」だった。20世紀初頭にリオのクラブなどが黒人や混血選手を入れ、白人チームをやっつけはじめた。そのころからサッカーが低所得層にも広がり、「多人種混合」のブラジル独特のチームカラーが出来上がった。

黒人は一般的に運動能力に優れ、リズム感も良いとされる。その資質が英国式サッカーと融合し、長期間かけて熟成されてきた。ブラジル人は人種差別も偏見も上下関係もない「完全

平等な世界」をサッカーに見いだした。だからこそあらゆる階層が熱狂的になった。

ブラジル流サッカーにはいつもわくわくさせられる。他国のサッカーと違って決まり切った戦法を使うのではなく、独創的で幻想的な技を繰り出してくる。次の展開が読めない緊張感がたまらない。これは上質のエンターテインメントだ——今度もそうなるはずだった。

しかし、第19回W杯南アフリカ大会でブラジル代表チームはベスト8で姿を消した。肝心なところで「ブラジル流」を見せることなく敗れ去った。残念至極だが、勝負事だから仕方がない。

南アフリカ大会では「堅守速攻」がはやった。しっかり守備を固めて、すきを見てカウンターに出て一気に勝負を決める。日本がそうだった。W杯直前に岡田監督(当時)は持論を変えて守備的な布陣を選択する。まず守って本田のワンチャンスに懸ける戦法でベスト16まで押し上げた。日本にPK勝ちしたパラグアイもそうだった。

でもブラジルだけはそういうことをしてほしくない、とみんな思っていた。あらゆるテクニク、アイデアを駆使して、どんな相手でも突破口を探し、点をもぎ取る。突然のフェイントで敵をあざむき、ゴールを決める姿がブラジル人の国民性と重なるから喝采かつさいを浴びるのである。

遊び感覚のように見えても、それが長い間のブラジルサッカーの伝統であり、存在感の発露でもあった。しかしドunga代表監督(当時)はブラジルの特長を最初から捨ててかかり、「まずは守備」というブラジルらしからぬ戦い方をした。彼は選手時代「こわもての守備の人」として知られた。派手で華やかなプレーは必ずしも勝利に結び付かない、と信じていたようだ。

魅惑のテクニクを持つロナウジーニョを代表に招集せず、規律をしっかり守るカカを中心にしたチームに仕立て上げたのもそうした理由による。伝統の「美しく勝つ」サッカーは封印

した。

結果は見ての通り。準々決勝でオランダにしてやられ、6度目の優勝は夢と化した。オランダがW杯でブラジルに勝ったのは74年以来という番狂わせだった。

これから2014年W杯に向けて代表チームの立て直しに入るが、今度は主催国だから負けるわけにはいかない。守備重視で失敗したドunga氏には悪いが、先のW杯で優勝したのは、攻撃的な美しいパスサッカーを貫いたスペインであった。日本経済新聞サッカー担当の武智記者は「ブラジルがやるべきことをスペインが先にやった」と書いた。

ブラジル・ファンのひとりとしてはブラジルに「美しくなければサッカーではない」という別次元のサッカー文化を見せつけて優勝してもらいたい。多人種融合のブラジルにしかできない多彩なサッカーだ。

ところで、サッカーW杯で優勝するとすごい褒美がもらえるのをご存知だろうか。南アフリカ大会の優勝国スペインは27億円をもらったが、そんなケチな話ではない。もっと大きな「翌年からの景気回復」という経済効果である。

経験則はこうだ。ブラジルがW杯で最初に優勝したのは17歳のペレがデビューした1958年。さらに1962、70、94、2002年が加わり優勝回数は世界一の合計5回だ。58、62年はクビチェック政権の経済開発政策によって第一次ブラジル投資ブームが起こった。70年の時は「ブラジルの奇跡」と呼ばれる高度成長期に入った。

驚いたのは94年のアメリカ大会で優勝した時だ。カルドゾ蔵相率いるブラジル経済当局は優勝を予測していたかのように7月に新通貨レアルを発行し、3ケタインフレは1年後に年率2ケタに下がった。2002年の時は翌2003年にルラ大統領が登場、経済は上昇気流に乗った。

W杯優勝はブラジルに不思議な力を与えてくれるようである。